

平成 26 年 5 月 11 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520297

研究課題名(和文) 18世紀アフリカ系作家と環大西洋の英文学

研究課題名(英文) African-British Writers and Trans-Atlantic English Literature in the Eighteenth Century

研究代表者

久野 陽一 (Kuno, Yoichi)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：40242888

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：当該テーマにしたがって文献を調査・研究した結果、主に以下の通りの主題に関する成果が発表された。(1) オラウダ・イクイアーノ『アフリカ人、イクイアーノの生涯の興味深い物語』を本邦初訳で翻訳刊行して詳細な作品解題を付した。(2) 18世紀を通じて繰り返し翻案された“Inkle and Yarico”の物語群において継承されるセンチメントの原型を示した。

研究成果の概要(英文)：As a result of this study on eighteenth-century African-British writers and trans-Atlantic English literature, papers on the following topics were published: (1) first Japanese edition of Olaudah Equiano's *The Interesting Narrative* with detailed commentary; (2) sentimental pattern in series of "Inkle and Yarico" episodes.

研究分野：人文系

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英文学 18世紀 アフリカ系作家 環大西洋

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者は、これまで研究の出発点として、18世紀イギリス文学において主流をなした、いわゆる「感受性」の文学、特に Samuel Richardson, Laurence Sterne からセンチメンタル小説に至る文学を中心に研究を行ってきた。そして、その底辺には、広く文化的な価値観として、常にある種の倫理・道徳といってもよい美的価値判断が存在することを見出した。端的な代表例を挙げると、何らかの苦痛を感じているヒーローやヒロインに対して読者が同情あるいは共感する場合に見られる価値判断である。しかし、同時代の文化的な背景を研究するにつれて、このようなフィクションとは別に、現実の奴隷貿易と奴隷制度が生み出した悲惨な状況を英語で語るアフリカ系の作家が活躍していたことを知るに至った。たとえば、1789年に初版が出版された Olaudah Equiano の自伝は、当時、*Robinson Crusoe* よりも売れたという。こうしたアフリカ系作家の作品を読んだ大半の白人読者たちの感受性は、白人作家たちの作品がもたらしたそれといかなる関係が認められ、それが文化全体をどのように変容させたのか。このような着想から本研究の研究代表者は、「18世紀アフリカ系イギリス作家と感受性の文学」という課題で、平成18~19年度科学研究費補助金(萌芽研究)によって研究を行った。その成果の一部は、「「彼ら」と「あなたたち」の『興味深い物語』— オラウダ・イクイアーノのセンチメンタリズム」(『英語青年』150 [2005]: 609-613)及び「『興味深い物語』のジェンダーと起源」(『日本ジョンソン協会年報』29 [2005]: 12-16)などの論文として発表された以外にも、日本英文学会第78回大会(2006年5月)のシンポジウム「英文学と<文明化>の変遷」において、「感受性と文明の境界」として口頭発表された。この研究は、さらに「18世紀アフリカ系作家と奴隷貿易廃止運動の文学に関する研究」という課題で、平成20~22年度科学研究費補助金(基盤研究(c))によって継続された。その成果の一部は、「イグネシアス・サンチョの静かな生活」(『十八世紀イギリス文学研究 [第4号] 交渉する文化と言語』[開拓社, 2010] 所収)や「色をつけないこと— フランシス・ウィリアムズ問題」(『外国語研究』42 [2009]: 59-67)などの論文として発表された。本研究は、以上の成果をふまえて、それを引き継ぎ、さらに深化・発展させるために着想された。

2. 研究の目的

本研究は、端的には以下の二つの点を主な目的とする。

(1) 第一に、18世紀に英語で著述活動を行ったアフリカ系の作家を再評価すること。具体的には、Ignatius Sancho, Phillis Wheatley,

Quobna Ottobah Cugoana, Olaudah Equiano などの作家たちと同時代の感傷主義や人道主義思想との関連を解明し、主流文学の中に位置づけることである。

(2) 第二の目的は、こうした作家たちが登場する背景となった18世紀から19世紀初頭にかけての英語圏の著述を環大西洋地域という視野から再検討し、文学のみならず文化的・政治的思潮を射程に入れた上で、この時代の特異性と重要性を明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究は、課題に関連する一次資料及び二次資料を収集し、それらを研究代表者が吟味し、整理・分析することによって進められる。分析のポイントとしては、文学作品として同時代の主流文学との関連を念頭に置きながらも、文学とそれ以外の歴史的資料との境界をいったん無効にして、新しい視点から様々な文献の解釈を進めることを重視した。

4. 研究成果

(1) 研究期間を通じて、研究計画に従って、18世紀イギリスにおけるアフリカ系作家と環大西洋地域における英語文学の全体像を把握するための資料調査をおこなった。それに当たって、最新かつ重要な関連文献のうち未収集のものを中心に収集をつづけていた二次資料のうち、Eve Tavor Bannet, *Transatlantic Stories and the History of Reading 1720-1810: Migrant Fictions* (Cambridge: Cambridge UP, 2011) および Eve Tavor Bannet and Susan Manning, eds., *Transatlantic Literary Studies, 1660-1830* (Cambridge: Cambridge UP, 2012) は、本研究課題のテーマ設定と直接に関わることから、極めて重要な指針を提供してくれた。

(2) 本研究テーマにおける最も重要な文献であるオラウダ・イクイアーノ『アフリカ人、イクイアーノの生涯の興味深い物語』を本邦初訳で翻訳刊行した。本書には、これまでの研究成果を凝縮して詳細な作品解題を付し、18世紀の英語圏におけるアフリカ系作家の重要性を示した。作品解題においては奴隷文学・冒険物語・宗教的伝記・政治文書という多層的な側面を持った作品の重要性を強調した。以下、この重要性の要点を要約する。たとえば、本書の第10章においてイクイアーノが啓示を受けるエピソードはこの伝記のクライマックスの一つだが、それは聖書を読むことを通じてもたらされた。『興味深い物語』には宗教的伝記の側面があり、身体的な解放、すなわち奴隷状態から自由を手に入れるまでのイクイアーノの生涯に、精神的な解放、すなわちキリスト教における魂の救済のパターンが重ね合わされる。イクイアーノ

にとって精神的に生まれ変わることに奴隷貿易廃止運動に深くコミットしていくことは分かちがたかった。彼はキリスト教の宗派としてはメソジスト派と交流しながら啓示を受けるにいたる。イクイアーノに自由を与えたロバート・キング、何度も言及されるアンソニー・ベネゼットはクエーカー教徒であったことが知られている。奴隷貿易廃止を訴える人道主義者グランヴィル・シャープらへの信頼もこの流れから理解できる。一七七二年、ジャマイカから連れてこられた黒人奴隷ジェームズ・サマセットについての裁判の判決でマンズフィールド卿は、イングランドの法では、いったんイングランド国内に入った奴隷は強制的に国外に連れ出すことはできないと宣言した。シャープは、マンズフィールド判決と呼ばれるこの画期的な判決を導き出すのに重要な役割を果たした。本書の第10章でジョン・アニスの救出を試みたときイクイアーノがシャープに助けを求めたこと背景にはこの判決がある。イクイアーノとシャープとの関わりはその後も続いた。『興味深い物語』ではそのほか、トマス・クラクソン、ジェームズ・ラムジーなどの奴隷貿易廃止論者についても言及されている。一七七九年にアフリカでのキリスト教伝道師に志願したことも、イクイアーノにとって宗教と奴隷貿易廃止運動の関係が深かったことを示している。本書の12章で述べられているシエラレオネ移住計画の挫折は、その後のイクイアーノが進む方向を決定づけた。1780年代、アメリカ独立革命でイギリスの側についていた黒人が大挙してブリテン島に押し寄せた。その結果、ロンドンなどの都市部では、貧困に苦しむ、そのほとんどが元奴隷の黒人が爆発的に増加したことが社会問題になっていた。これが貧困黒人シエラレオネ移住計画につながり、議会で奴隷貿易について議論されるにいたる背景にもなった。この移住計画の執行代理人を辞任されたイクイアーノは、そのことに対する憤慨から新聞や雑誌に投書して自分の政治的立場を明確にしていく。それは、人道的な計画に賛同することによってイギリス政府の側に立ちながらも完全にそこに属することのできない存在という立場、あるいは、イギリス「臣民」でありながらもその内部で異議を唱える「異人」の「アフリカ人」を代表するという立場である。『興味深い物語』に全文が引用されている国王ジョージ三世の王妃シャーロットに慈悲を請う書簡も、このような立場から書かれている。こうして「アフリカ人、オラウダ・イクイアーノ」が誕生する準備が整っていく。もともとアフリカの人々は自分たちを「アフリカ人」とは考えていなかった。彼らは言語も宗教も政治形態も異なる個別の部族からなっており、ヨルバ族、イボ族、アシャンティ族など、それぞれのエスニック・グループが彼らのアイデンティティだった。彼らが自分たちを「アフリカ人」と認識する

ようになるのは、18世紀後半、奴隷としてアフリカから切り離された者たちの一部が自分たちを「アフリカの息子たち」と呼ぶようになって以降のことである。つまり、総体としての「アフリカ」はこの時代の奴隷貿易廃止運動が起こって初めて概念形成されたのだ。本書では語られていないが、ほかならぬイクイアーノも何人かの仲間の黒人たちといっしょに「アフリカの息子」を名乗った。彼らから1787年12月15日付けでグランヴィル・シャープに宛てられた手紙が残っている。「グスタヴス・ヴァッサ」やオトバ・クゴアーノを含む十二人が名前を連ねる「アフリカの息子たち」は、この手紙において自分たちを「ひどく虐待されたアフリカの民とその子孫」と同定している。ここでは、アフリカで生まれた者だけでなく、一度もアフリカの地を踏んだことのないその子孫に対しても「アフリカ人」というアイデンティティが与えられる。これはディアスポラの自己同定のあり方にほかならず、後年のパン＝アフリカニズムの先駆となる考え方である。クゴアーノが一七八七年に出版した『奴隷制と人身売買の邪悪で不正な取引についての見解と所感』は、この「アフリカの息子たち」としての活動のなかから生まれた政治的著作であり、イクイアーノもその執筆に関わったと考えられている。そして、1789年3月、議会で奴隷貿易の廃止についての議論が盛り上がりを見せるタイミングで、明らかな政治的な意図をもって『興味深い物語』が出版されたとき、すでに活発な奴隷貿易廃止運動家として知られていた「グスタヴス・ヴァッサ」は、ここで初めてアフリカ名「オラウダ・イクイアーノ」を名乗る。この「オラウダ・イクイアーノ」という名前は、本書のタイトル・ページに使用されている以外、公的な場だけでなく遺言書や私的な文通においてもほとんど使われない。使われたとしても「オラウダ・イクイアーノことグスタヴス・ヴァッサ」と、つねに通称と併記される。アフリカ名は自伝を書くにあたってのペルソナ、あるいは一回限りのペンネーム、おそらくは「アフリカの息子」として新たに獲得したアイデンティティだと考えられる。ここにW・E・B・デュボイスの言う、白人社会に生きる黒人の「二重意識」を認めることができる(W. E. B. DuBois, *The Souls of Black Folk* [1903]、邦訳『黒人のたましい』[岩波文庫、一九九二年])。元奴隷グスタヴス・ヴァッサは「アフリカ人、オラウダ・イクイアーノ」となった瞬間から、「アフリカ人」の「声」を持つことと引き替えにアイデンティティの二重性をみずから引き受けたことになる。作品解題においては、このような二重性を持った作品の重要性を明らかにした。(3) 1789年に出版された Olaudah Equiano の自伝 *The Interesting Narrative* で語られる、11歳でアフリカの村で誘拐され西インド諸島に連れてこられ

て奴隷となった黒人の半生は、その後の時代の奴隷物語に一つの原型を提供した。一方、1711年に *The Spectator* で紹介されて以来、18世紀を通じて繰り返し翻案された“*Inkle and Yarico*”の物語群も、まったく別の意味で継承される原型である。Equianoが“*Inkle and Yarico*”を知っていた証拠はないが、ともに西インド諸島をめぐる、暴力的であると同時に強く感情を揺さぶる物語が含まれている。そこで、日本ジョンソン協会第44回大会(2011年5月23日、小倉リーセントホテル)シンポジウム「涙と冒険のカリブ——西インド諸島と18世紀英文学の諸相」において「波の間のセンチメント——*Olaudah Equiano*を通して“*Inkle and Yarico*”を読む」と題する発表を行い、この対照的な両者を通じて西インド諸島を舞台にした感情の表象について考察した。*The Interesting Narrative* は奴隷貿易廃止運動に寄与するという目的で、主に白人読者を想定して、彼らの「心」に訴える感情を吐露するセンチメントの例が数多く見られる。それに際して同書では、1773年の長編詩 *Thomas Day and John Bicknell, The Dying Negro* や *John Milton, Paradise Lost* などからの引用がちりばめられる。それはEquianoが英語を学ぶことによって「内面化」した、感傷的な表現のレパートリーの範囲を示している。Equianoはこれらのテキストを引用することによってその表現のパターンに同意をしているように見える。一方、“*Inkle and Yarico*”の物語群も白人読者に向けられたセンチメントを含むという点で、*The Interesting Narrative* との共通項がある。*The Spectator*, No. 11 (13 March 1711) で紹介されたエピソードと、*Frances Seymour, Countess of Hertford* による韻文での二つの翻案を比較すると、とくに非白人話者が白人に対して発するセンチメントの叙述パターンによって *The Interesting Narrative* と結びつき、明らかに同じ感性の文化圏のテキストであることが分かる。

(4)「環大西洋」という観点で研究する上での重要文献、田中秀夫『アメリカ啓蒙の群像—スコットランド啓蒙の影の下で1723-1801』(名古屋大学出版会, 2012)を吟味して本研究との接点を模索し、『日本18世紀学会年報』28巻に書評を発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

久野陽一、(書評)田中秀夫『アメリカ啓蒙の群像—スコットランド啓蒙の影の下で1723-1801』(名古屋大学出版会, 2012)、『日本18世紀学会年報』28巻、2013、82-83。

査読無

〔学会発表〕(計1件)

久野陽一、「波の間のセンチメント——*Olaudah Equiano*を通して“*Inkle and Yarico*”を読む」、日本ジョンソン協会第44回大会、シンポジウム「涙と冒険のカリブ——西インド諸島と18世紀英文学の諸相」、2011年5月23日、小倉リーセントホテル

〔図書〕(計1件)

久野陽一、(翻訳及び解題)オラウダ・イクイアーノ『アフリカ人、イクイアーノの生涯の興味深い物語』(研究社, 2012)、349頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

久野陽一 (KUNO YOICHI)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：40242888

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：